

## 風間計博『強制移住と怒りの民族誌——バナバ人の歴史記憶・政治闘争・エスニシティ』

明石書店, 2022年

小林 誠

本書は、フィジーのランビ島に住むバナバ人の歴史記憶に関して、怒りという感情と関連させて検討した民族誌である。バナバ人は現在キリバス領に位置するバナバ島を故郷とするが、20世紀初頭から燐鉱石の採掘が行われ、第二次世界大戦後にはフィジーのランビ島へ強制的に移住させられた。筆者はランビ島でのフィールドワーク中にバナバ人の怒りを目の当たりにし、歴史記憶と感情との関係について考えるに至ったという。

それでは、本書の内容を章ごとに紹介したい。

「はじめに」で、本書の目的はバナバ人の歴史を紹介することと、怒りの感情と関連させながら歴史記憶の継承と忘却について検討することであると示される。続く「序章 感情と人類学」では、感情に関する人類学的な研究をレビューした上で、これまで「隠蔽」されてきた生物性を議論に取り込む必要性を論じる。著者によれば、感情や身体性を人類学的研究から排除する「社会学主義」も、感情を文化的構築物としてとらえる「文化主義」も、あるいは生医学における「大脳中心主義」も、自然／文化、身体／心といった二分法に基づくものであり、それを超克するためには「生物性が内包する文化的構築性を認めると同時に、身体そのものや身体的プロセスとして顕れる感情を肯定的に捉え直し、文化による隠蔽から救出するという試み」(p.36)が有効であるという。また、ここで人間を自立した個人ととらえ、感情は個人の内側が表情や身振りなどによって外的に現れたものという見方を批判し、人間は環境や他者と動的に「交換（交感）」する間身体的存在であると論じる。

「第一部 バナバ人の数奇な歴史経験」では、まず「序 歴史叙述と物語の効力について」にて、真偽にかかわらず、歴史的記憶がそれを共有する人々を「感情的に激しく突き動かす効力 (potency)」をもつ点を指摘する。続く「第I章 燐鉱石採掘への抵抗と敗北—近代世界による包摂とバナバ人の認識論—」では、西洋人が残した記録から、バナバ人の近現代史を再構成する。評者がそれを年代にそって単純にまとめ直すと、1900年に西洋人によってバナバ島の燐鉱石が発見され、それを受けて1901年に英国ギルバート・エリス諸島保護領にバナバ島が編入され、さらに1916年に同植民地となる中で、燐鉱石の採掘が進められた。採掘にあたっては太平洋燐鉱石会社や英国燐鉱石委員会といった採掘会社、あるいは植

民地支配の都合が優先され、バナバ人から土地、そして土そのものが収奪されていった。筆者は、ヨーロッパ人に対抗するためにバナバ人が近代性を獲得しようとしてきた点を指摘し、採掘に対する補償の一つである年金の受給者をめぐってなされた近代的な人間集団の分割（「真のバナバ人」、「今血バナバ人」、「非バナバ人」）を背景に、バナバ人のエスニシティが胚胎したと論じる。

「第二章 脱植民地化過程におけるバナバ人の生成—太平洋戦争・強制移住・法廷闘争—」では、ランビ島へ強制移住させられた経緯とその後の法廷闘争が詳述される。1942年にバナバ島を占領した日本軍は、島にいたバナバ人らをナウル、コスラエ、タラワに強制的に移送し、敗戦直後に島にいた人々を銃殺した。島外にいたバナバ人らは、採掘を円滑に進めたい英国植民地政府と採掘会社の思惑によってフィジーのランビ島に強制的に移住させられた。1960年代以降、政治的な運動が活発化し、バナバ人は故郷のバナバ島をキリバスから分離して、現在の居住地であるランビ島とあわせて独立することを主張し始めた。また、1970年代には採掘会社と英国政府に対して失われた土地に対する補償を英国高等裁判所に訴えて大きな注目を集めた。しかし、どちらも彼らの主張が認められることはなかった。

「第二部 集合的感情と歴史記憶」の「序 歴史記憶と感情の表出」では、人類学者のマジエオによる対外的に自らの歴史的正当性を表明する公的な「集団間記憶」と矛盾を孕み断片的で識閥下の暗示的なものも含む「集団内記憶」という区分が紹介されるなど、歴史記憶についての議論がまとめられる。続く「第三章 怒りの集合的表出—強制移住の歴史記憶とエスニシティ—」では、フィールドワーク中に筆者が目当たりにしたバナバ人の怒りが描写される。キリバス国会において、ある議員がランビ島へ小型の四輪駆動車の供与を批判し、「バナバ人とはいったい誰か」、「バナバ島はキリバスのものである」といった発言をしたことがランビ島に伝わると、人々の「激しい集合的な怒りを惹起し」、集落は「興奮した異様な雰囲気」になったという。著者は「バナバ人と誰か」について詳細に検討した上で、バナバ人であるためには歴史記憶を共有し、かつ怒りとともにそれを想起する「潜在力」が必要であると論じる。

「第四章 歴史歌劇と共感の効力—自己と他者の接合／分断—」では、舞踊団による歴史歌劇が検討される。歌劇を詳細に分析した上で、バナバ人エスニシティの創出・維持とキリバス人との差異化、外部者へ間身的的に「悲哀」を感じさせるという効力を持つとまとめる。筆者は歌劇によって外部の他者との連帯がつくられるが、自他の分断を引き起こすものと批判する。ただし、バナバ人の日常の生活をみると、他者であるキリバス人とのつながりや共通性がみられる点を指摘する。

「第五章 二つの故郷の同一化—集合的記憶の操作による先住性の領有—」では、まず集団間記憶と集団内記憶をそれぞれ「単一的記憶」と「多重的記憶」と読みかえた上で、バナバ人は土地を奪われた先住民である一方で、ランビ島においては土地を奪った移民であると

いう二重性が検討される。広くオセアニアに諸社会において土地はそこで暮らしてきた人々そのものであるといったように、人間は土地と不可分な関係を持つとされる。筆者は、移民先のランビ島はバナバ島の土地によって得られた資金で購入されたのであり、燐鉱石の資金を介して「換喩的」に、バナバ島とランビ島という二つの故郷が同一化しようという。両島の同一化として、バナバ島の地名の移植や、キリスト教の伝来などのバナバ島で起きた歴史的出来事のランビ島での再現について説明する。

「第三部 ランビ島における日常生活と都市への再移住」では「ランビ島民」としてのバナバ人について検討されている。まず、「序 ランビ島の困窮化」では、燐鉱石の枯渇に伴い現金収入が途絶える中で、経済的に困窮し、外部世界への経済的な依存を深める一方で、ランビ島では農耕によって食料を獲得しており、必ずしも苦しい生活を強いられているわけではないと説明される。「第Ⅵ章 キリスト教の集会活動と「ランビ島民化」」では、歌劇においては悲哀のみならず、ランビ島移住後の「喜び」が表現されている点を指摘した上で、怒りや悲哀のみに還元されないバナバ人の日常生活を描写していく。バナバ人という自称には悲哀や怒りといった感情が付随するのに対して、彼らはランビ島民として日常を送っており、そこでは笑いなどの感情によっても特徴づけられる。筆者はランビ島の日常生活としてキリスト教の献金集会や娯楽、生業活動を検討した上で、「身近な経験によって培った知識や感情の共有を通じて、「ランビ島民」が生成している」(p. 309)と論じる。

「第Ⅶ章 都市居住バナバ人の自己認識—認知論的視点からみたエスニシティ—」では都市のバナバ人における日常生活の中での柔軟な自己認識が検討される。具体的には、フィジーの首都スヴァが取り上げられ、個々人の日常的な相互行為を微視的に捉える「認知論的視点」によって分析される。筆者は、島政府のスヴァ事務所、教会、カフェ店などがバナバ人のネットワークの拠点となっているが、バナバ人と同じ言語を話し、文化的な共通性も多く、親族的なつながりもあるキリバス系の人々と日常的な関係を持っていることを指摘する。都市において圧倒的なマイノリティとして暮らすバナバ人はキリバス人と同じ「類」として共存する状況が生まれていると論じる。

「第Ⅷ章 都市の知識人による「純粋なバナバ人」の抽象的構築」では、都市のバナバ人知識人が主張する「純粋なバナバ人」像が検討される。都市の知識人は文献資料などに基づき、身体、言語、伝承、文化などの観点で「バナバ人」の固有性を見出そうとしてきた。著者はバナバ人とキリバス人とは差異もあるが、多くの共通点をもつと指摘し、いずれかの過度な強調は「政治的な信念」と「感情的な主張」によるものであると論じる。最後に、固定的なバナバ人像と輪郭の不明瞭な「類」としての自己認識という「複相性」に注意を促す。

「終章 歴史記憶の持続と怒りの衰微」では、バナバ人の歴史を改めてまとめ直した上で、フィジー国内におけるバナバ人の法的な位置付けに関わる問題が検討される。最後に、オークランドやタラワなどへ再移住するバナバ人を取り上げ、彼らの日常生活の中でバナバ人と

いう自己意識がかなりの程度、消失していると指摘する。「おわりに」では、著者がある牧師に日本でバナバ人の本を出したいのだが、どう思うかと尋ね、日本の人々にバナバ人の物語を伝えるのはとてもよいことだと賛同を得たというエピソードが紹介される。筆者は、バナバ人の歴史については期待に「さほど大きく外れず」に書けたがバナバ人のエスニックな固有性などについては「彼らの期待にはすべて応えることはできない」とした上で (p. 399), 「平板な定型化に走らないことが肝要」(p. 399) と論じる。

それでは、本書に関して多少のコメントをしたい。なお、評者はランビ島から南西に 20 km ほどのところにあるキオア島でフィールドワークをした経験があるが、バナバ人の文化・社会についてはほとんど知らない上に、本書の主題である歴史記憶と感情についても門外漢である。そのため、コメントと言ってもフィールドに近い他の人類学者による単なる感想に過ぎないことをご容赦いただきたい。

かなり前に読んだのにもかかわらず、いまでも鮮明に記憶に残っている民族誌の多くがフィールドでの強烈な経験を端緒とし、それについて深く考察したものである。もちろん、フィールドでの経験がそのまま民族誌になるかという点とそううまくいかないことも多く、さまざまな紆余曲折があるのだろうが、それでもフィールドは新たな問いが生まれる母胎であることは確かであろう。その意味で、筆者が目当たりとしたフィジーのランビ島でのバナバ人の怒りを端緒に感情や歴史記憶について考察していく本書は私にとってお手本にすべき民族誌であるといえよう。

本書では、バナバ人というエスニシティが歴史的な記憶が喚起する怒りによって成立すること、そして、その怒りは間身体的に共有されることが説得力をもって描かれる。そもそも感情そのものは確固たるものとして存在しているわけではなく、当事者もまた言語化できるとは限らない。そこで筆者は「言語を介さない経験的な共感」や「状況に即した感情移入」(p. 37) が必要であると論じる。人類学的なフィールドワークもまさに感情の間身体的な共有で、筆者がいうところの「交感」に基づくものとしてとらえ直すことができる。

そして、民族誌を書く際には「ミクロ次元の身体所作の観察や会話分析を取り入れ、多様なエピソード等を挿入し、人々の表情や場のリアリティを詳細に描写すること」ことや「過去の出来事の想起と語りにおける感情の肌理を見出すこと」(p. 38) が有効であると筆者がいうように、本書でも多様なエピソードや細かい描写がリアリティをもつ。とりわけ、印象的なのは本書の出発点にもなっている集合的な怒りの状況である。「普段は明るく快活な」ある女性が「興奮のあまり声が上ずり、涙を浮かべて話し続け」、「激しい怒りに身体を震わせて」おり、他にも「怒りのあまりラジオを壁に叩きつけて壊した」という話を耳にしたと記述されおり、「興奮した異様な雰囲気」が伝わってくる (p. 176)。

怒りをはじめとする感情は人々との間で「交感」されるが、だからといって人類学者は彼

らの考えをすべて受け入れるわけではない。筆者は、バナバ人ナショナリズムを批判しつつ、内面化しているキリバス人的な視点からバナバ人を眺めながら、彼らの自己認識の「複相性」について注意を促し続ける。バナバ人の成立に歴史的な記憶に関連した怒りが必須となるならば、ランビ島民としての彼らの日常は主に喜びという感情の共有によって彩られる。そして、著者は排他的なバナバ人像と日常生活の中での柔軟な自己認識を対比的に語るが、それは歴史記憶のあり方について筆者がいう「単一的記憶」と「多重記憶」との対比にも重なり合う。本書に通底するのは、二分法を克服するために、ものごとを単純に一元化することを避けて、両面を丁寧に論じる筆者の姿勢である。

「はじめに」で、本書の目標として「故郷の島からの強制移住を経験したバナバ人の数奇な運命」(p.6)を、日本の読者にあらためて紹介することとある。「数奇な運命」もそうであるが、それに単純に還元されるわけではないランビ島民としての日常生活も本書を通して示されている。本書を読み終え、現在の日常生活との対比において過去の歴史と記憶を位置づけた時、その「数奇な運命」が鮮明に立ち現れてくる。だからこそ、「直接経験」を持たず、間身体的に交感しえない評者にも、著者が紡ぎ出したであろうテキストの向こうに、バナバ人／ランビ島民の息遣いを感じられた気がしたのであろう。